

<p>LIFE</p>	<p>キーワード：情報処理 批判的思考 論証構造 ディベート</p>
<p>新聞から情報を分析しよう < 配当時間数 12時間 ></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>身のまわりにあふれる情報を批判的に分析することをテーマに、新聞などに掲載される身近な主張を論証の構成要素に分解し、それを批判的に吟味しながら、その主張の論理性や正当性を検証することで、情報を処理する力を育て、自らがより説得力のある意見を構成する力を養う。</p> </div>	

1. 単元の目標

現代の情報化社会の中で、生徒はあふれるほどの情報にさらされている。毎日、新聞や雑誌、TV報道などを通して多くの重要な社会問題がその解釈や評価とともに伝えられてくる。我々はそれが「真実」であり、「正しい評価」であるかのように受け取りがちである。生徒がこうした情報を批判的に分析し、評価・判断できるようになることは情報化社会においては、非常に重要なことである。この学習は生徒が与えられる情報に惑わされること無く、主体的に生きていけるよう、情報を批判的に分析し、説得力のある自分の意見を形成する力を養うことである。

2. 単元の構成と特色

< 第1段階：論証の構造を理解する >

一般的に一つの意見は一定の論証構造を持っている。それは、事実 [D/data], 解釈 [W/warrant], 主張 [C/claim], 及び裏付け [B/backing] という4要素から成り、それぞれの要素は、ある事実 [D] に基づき、その事実解釈 [W] を加え、その事実はこのように解釈することができる、それゆえにこういう主張 [C] が成り立つ、さらにこの主張の正当性はこうした裏付け [B] に支えられている、というように構造化されている。この意見に関する論証の構造を理解することがこの単元の第1段階である。

< 第2段階：論証の構造を用いて意見を分析する >

論証の構造を理解した上で、生徒は比較的単純な論理構成をもつ意見を実際に分析してみる。分析の手順に従って、いくつかの事例を論証の構造に従って分析することで、生徒は意見を論証の諸要素に構造化していく技能を身につけていく。

< 第3段階：批判的な思考で意見を分析する >

第4章 LIFEの事例

意見の論証構造を確定できるようになった次の段階は、その意見の論証を批判的に吟味することである。吟味は論証構造の各要素に対していくつかの観点から行われる。例えば、事実に関しては、その事実は本当にあったことをどう証明することができるのか、その信憑性はどれほどあるのかといった観点からの吟味が、解釈については、その解釈の論理性や事実との整合性などの観点からの吟味が、裏付けについては、その根拠の正当性や裏付けとしての妥当性などの観点から批判的に吟味がなされる。

< 第4段階：問題に対する自分の意見を形成する >

こうした批判的思考による吟味の結果、その意見が分析でき、その意見に対する自らの見解も形成されることになる。生徒は最終的な見解をレポートにまとめて発表する。

3. 主題に迫るための手だて

情報を全て鵜呑みにしたり、逆に情報に対して何らかの根拠も無しに単に批判し、反対意見を唱えるだけでは、議論のための議論に陥ったり、懐疑的になってしまうだけで、主体的な意見を持つことにはならない。人の意見を分析することで、はじめて何らかの根拠を持ってその意見を評価できるようになり、自らの見解をもつこともできるようになる。そのためには、批判的に意見の論証構造を分析するための思考の枠組みを習得することが必要となるのである。こうした枠組みを意識的に使い、意見を分析をさせる訓練を重ねることで、批判的な思考の力が育成されることが期待できる。

4. 単元における評価の観点・方法

(1) 社会的な問題に対する興味・関心・知識・意欲・態度

社会的な問題に対して興味・関心を持ち、その問題に関する知識や情報を適切メディアを活用して意欲的に収集することができているか、資料に基づいて自分の意見を形成しているかを評価する。

(2) 批判的な思考力の育成

他者の意見に対する分析や自らの形成した意見に対し、論証構造を踏まえた上で、各要素ごとに的確な吟味と評価が加えられているか、自分の意見が論証の構造を踏まえ、論理的かつ説得性を持って構成されているかを提出されたレポートで評価する。

5. 教科等との関係

教科の授業においては、各教科ごとに個別の知識内容体系が確立しており、こうした知識内容の習得を中心に授業が構成されることに比重が置かれる傾向がある。生徒がこうした知識内容を獲得する技能も、教科固有の探求方法を用いて行われることで授業に組み込まれるのであるが、「客観テスト」などでは、どちらかという知識内容獲得の度合いに評価も偏りがちである。そこで情報分析能力を中心課題とした授業を実施することで、こうした課題を補うことにしたい。

第4章 LIFEの事例

7. 指導のポイント

< 論証の構造を常に意識させること >

情報を分析するための技能を習得するにあたり、最も重要なことは、論証の構造を常に意識させ、意見を論証の諸要素に分類して整理する習慣を身につけることである。論証の諸要素を意識化させるために、以下のような作業手順を設定した。

資料に示された論者の主張を確定する。

事実の部分と解釈の部分进行分类する。

論者は提示した事実に対しどのような解釈を加えることで主張を導いているか、事実と解釈の対応関係を確定する。

論者の主張に導くまでの理論構成を整理する。

論者は自分の主張の正当性を保証するためにどのような裏付けを提示しているかを確定すること。

このように、意見を論証の諸要素に分類し、整理するという作業を、段階に分けて丁寧に行うことで、論証の構造を意識的に使って意見を分析するという習慣が身についてくると考える。

授業では、生徒に対し次のような例題を提示し、この論者の意見について、論証の構造に従って意見を分析させた。

【例題1】

「秋の贈り物に今の農業を想う」(農業 58歳)
[中国新聞「声」の欄より]

「宅急便でーす」。威勢のいい声と共に玄関にずしりと重い荷物が届いた。毎年今の季節に届く、ご主人と共にナシ園を営む同級生の友からの贈り物である。荷物をほどいてみると、例年より大粒の「豊水梨」がひとつひとつネットにくるまって並んでいる。ありがたく頂き、早々何個かを仏に供え、冷蔵庫にも入れた。夕食のあと、家族皆で「ウーン」とうなりたくなるほどジューシーで甘いナシを頂き、ころ合いを見計らって友にお礼の電話を入れた。友の話によると、いつもの都市より季節が先へ先へと進み、ナシも例年にもれず、収穫期が早かったという。あれこれ話が盛り上がったあと、「あんな、ナシ、今年でおしまいなんよ」と言う。「ええ？」と聞き返すと「主人も、もう年やのに、後継者もおらず、親の介護問題もあるしな」と彼女は残念そうに言った。

多角経営の規模を縮小するのだそう。私は「お宅もやっぱり。惜しいな」とあいづちを打った。かく言う我が家もここ一、二年、規模の縮小を図っている。この農家の現状は、今の日本農業の縮図と言えは言い過ぎだろうか？ 友達ご夫婦が丹精込めてつくられたナシを、今までにも増して深くかみしめ、甘みを口いっぱいにつくめて味わった。

意見を論証の構造に従って分析するにあたり、次のようなワークシートを用いた。

ワークシート

課題1：論者の主張をまとめてみよう。

- C1：友人の農家が農業の規模を縮小せざるを得ないのも当然である。
C2：日本の農業は先行きが暗い。

課題2：事実と解釈を分けてみよう。

【事実】

- D1：友人からナシが届けられた。
D2：友人は毎年ナシを届けてくれる。
D3：友人は経営の規模を縮小するつもりだ。
D4：友人の家では夫婦は高齢となった。
D5：友人の家では後継者がいない。
D6：友人の家では年寄りも年齢的に介護の必要な時期にきている。
D7：論者の家でも経営規模の縮小を図っている。

第4章 LIFEの事例

【 解 釈 】

W1：多角的な農業経営は重労働であり、人手と時間がかかるので、農業従事者の高齢化が進み、更に高齢者の介護問題が加わるならば、農業経営の規模を縮小せざるを得なくなる。
 W2：友人の家の現状も自分の家の現状も同様であるから、日本の農家は同じような状況にあるに違いない。

《論証の構造化》

D3はD4～D6の事実を根拠に導き出される結論(C1)でもある。そこでD4 D3, D5 D3, D6 D3の因果関係が論理的に成り立つかどうかを検証する必要がある。

[D4 D3の関係の吟味]

農業は重労働であり、人手と時間がかかるので、高齢者には農業経営の負担が重いと考えられる(W1)。それゆえ、高齢になった友人の農家が農業の規模を縮小せざるを得なくなるという因果関係は納得できる。

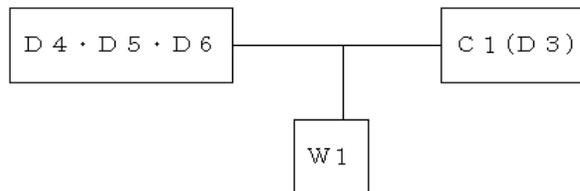
[D5 D3の関係の吟味]

若い世代が農業に従事しないならば、高齢者に負担がかかり、(W1)と同様の解釈が成り立ち、この因果関係も納得できる。

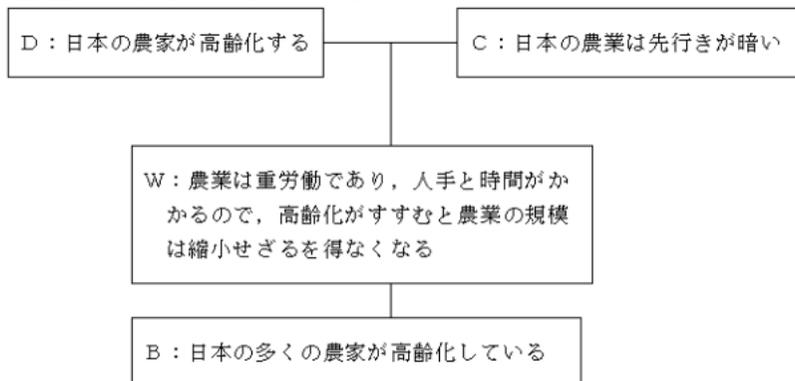
[D6 D3の関係の吟味]

親の世代の高齢化が進むと、その介護には時間と手間が掛かる。そこでこうした問題を抱える農家では(W1)と同様の解釈が成り立ち、この因果関係も納得できる。

この分析の結果次のような構造化がなされる。



さらに、D7は、上記に形成された論証構造に対し、自分と同世代の友人の農家がおかれている状況と、同様に農家である自分がおかれている状況が同じであることを根拠にして、この論理が、帰納的に日本全国の農家に当てはまるという一般化をしている。結果として論証の全体構造は以下ようになる。



第4章 LIFEの事例

<批判的に論証を吟味させること>

他者の意見について、それを論証の構造に従って整理した後、次の段階として、批判的に吟味することが求められる。他者の論証を批判的に吟味するために、論証の各要素に関して次のような観点が考えられる。

データ：この事実は何のメディアが伝えたものか、そのメディアの信頼性はあるのか、データはどのような観点で構成されたものか、等々の「事実」の信憑性についての観点からの吟味が中心となろう。

解釈：事実やデータに対して与えられた解釈は論理的な妥当性はあるのか。

主張：事実やデータ、及びそれに与えられた解釈からこうした主張を導くことに論理的な妥当性はあるか。

裏付け：論者の意見に信憑性や信頼性を与える裏付けは、どれだけ有効性が認められるか、裏付けそのものの信頼性はあるのか、等々の「裏付け」の有効性や信頼性についての観点からの吟味が中心となろう。

こうした論証の各要素に関するそれぞれの吟味すべき観点を、なぜこうした観点から吟味することが必要なのかというその意味を含めて、「枠組み」として持っていることが批判的に意見を分析することにつながるのである。指導にあたって、適宜生徒に疑問を投げかけたり、指導を加えたりしながら、こうした「枠組み」を習得させていくことが必要であろう。

<自分の意見を持つこと>

【例題】として提示した意見は先のように構造化することができたが、次の段階として、この構造化された意見に対し、生徒は批判的に分析を加えていくことになる。生徒には、考えられる疑問を列挙させ、それを検証していく作業をさせる。検証に際しては、次のようなワークシートを用いた。

ワークシート

【事実に関する批判】

- ・日本の農家のほとんどが高齢化に悩んでいると想定されているが、実際にはどの程度の高齢化が進んでいるのか。
- ・日本の農家の多くは兼業農家であるが、近年、大規模な専業農家も増えていると聞いている。こうした専業農家はどのくらいいるのか。
- ・農業を離職する農家は実際にはどの程度いるのか。
- ・農業の後継者不足が問題とされているが、最近農業をやろうとする「脱サラ」の人が増えているのも事実である。こうした人はどのくらいいるのか。
- ・こうした家族中心の農家が日本の農業生産全体に占める割合はどの程度か。

【解釈の論理性・妥当性に関する批判】

- ・機械化が進み、労働力の軽減が図られているので、高齢化が農業規模の縮小に必ずしもつながらないのではないか。
- ・例え零細な家族農家が規模を縮小したとしても、日本の農業全体の危機と呼ぶほどの事態になるのだろうか。

第4章 LIFEの事例

【意見全体に対する批判】

- ・日本は現在でも多くの農作物を海外からの輸入に頼っており、安い農作物を海外から輸入した方が得ではないか。

他者の意見について、それを批判的に分析した後、何が納得でき、何が納得できなかったかが確認できる。そこで納得できない事柄について、調べたり、それに対する反論を自分で組み立てることが必要となる。このように、他者の意見自分で批判的にを検証し、自分が納得できるようにすることで、その意見に対する自分の意見が主体的に形成されるのである。自分の意見を形成するまでの手順を次のようにまとめた。

論証の構造を分析した主張に対し、何か納得のいかない部分、疑問に思う部分があれば、それを書き出してみよう。

自分が納得できなかったり、疑問を感じたりした事柄について、自分でその問題について調べてみよう。

論者が提示した主張に対し、自分の意見を形成してみよう。

自分が他者の主張を批判的に吟味し、その主張が扱う問題に関して自らの主張を形成するには、自らが与えた批判と同様なレベルの批判に対し絶えうるものでなければならない。このことは、自らの主張をより説得性の高いものにしていく力をつけることになるのである。それまでに学習してきた、論証の構造を踏まえた意見構成になっているか、データの信憑性はあるか、データと解釈は論理的に整合性があるか、裏付け有効性や信頼性はあるか、各論証の構成要素が論理的に整合性があるか、などの観点から自らの主張を批判し、それに耐えうるような主張を形成していくことが重要である。

<評価に対する考え>

この単元の目標は、情報を批判的に分析でき、説得力のある自分の意見を形成できる力をつけることである。そこで評価は、授業における諸作業を通して作成された分析結果やレポートなどを判断材料に、こうした力をどの程度つけることができたかで判断される。評価は諸作業の過程・結果やレポートに対する「自己評価」、「相互評価」、「教師の助言」などを総合して判定されることとなる。

この単元では、生徒は、他者の意見を分析することを通じて、その人が関心をもった特定の社会問題が取り上げられ、その意見に対する批判を加え、その社会問題に対する自分の意見を形成することを求められる。こうした学習活動を通じて生徒は特定の社会問題に関わることになり、「現時点」での自分の意見を表明しなければならない。しかも自他ともに説得性を持った意見の形成が求められることになるので、様々な観点からある程度の深みをもった調査が必要となる。また、こうした社会問題は、将来にかけても生徒の前に現れるものであり、市民として何らかの判断を求められることになる問題である。その際にこうした単元での学習が理解の手助けになり、さらなる学習の広がりや深化へつながると期待される。そのためにも自己学習力を支えるこうした情報処理能力の育成は必要不可欠のものであるし、自分が納得するという形で自己評価ができるものになると思われる。